

教養ゼミにおける多文化間共修

～教養ゼミ 2年間の振り返り～

林 智

(工学部教養教育センター)

要約：工学部1年生選択必修科目・教養ゼミⅠおよび教養ゼミⅡ（筆者担当教養ゼミ）において、2019年度、2020年度で多文化間共修を実施した。近年は日本および世界の大学にとって、国際化は主要課題の一つである。日本人学生の海外派遣数も増加傾向にあるが、すべての学生がその機会を得られるわけではない。このような海外派遣の機会を得ることが困難な学生にとって、大学内で留学生との交流を持つことによる教育効果は大きいと考える。筆者教養ゼミにおいて多文化間共修を実践し、日本人学生における「外国語を学ぶ意欲」および「異文化理解」に対する教育的効果、および留学生にとっての多文化間共修のもつ意義を報告する。

キーワード：多文化間共修、異文化理解、地域学習

1. はじめに

21世紀に入り日本の人口減少が進む一方で、在留外国人数は増加傾向にある。今年に入り、新型コロナウイルス感染症の影響で外国との往来は著しく減少したが、いずれは改善に転ずると思われる。

富山県においても在留外国人の増加傾向は顕著である。「富山県外国人住民国籍・地域別市町村別人員表」によると、2015年は富山県内の在留外国人数は13,695人であったが、2019年には19,494人と、5年間で約1.4倍に増加した。富山県立大学（以下「本学」）においても同様の傾向がみられる。本学の「学術交流協定・留学生数等」によると、2017年の本学への留学生数は30名であったが、2020年は38名に増加した。特にインドネシア、ミャンマー等の東南アジア諸国からの留学生の増加が目立つ。また、近年はネパール、バングラデシュ等の南アジアからの留学生も散見される。

一方、本学における日本人学生の海外派遣に目を向けると、近年の動向とは必ずしも一致しない。近年の本学における学生の海外派遣数は20名前後で推移しており、海外派遣に積極的に応募する学生数は増えていない。この理由として経済的不安等があることは推測されるが、このことから異文化を経験する学生が本学においては多くないという事実がわかる。

近年の社会状況を踏まえると、本学日本人学生においても、今後は海外から訪れた人々と交流する機会は増えることが予想される。したがって日本人学生が海外に直接足を運ばずとも、大学内において異文化を体験することは、留

学の代替経験となり、大きな意義があると考えられる。筆者は、2019年度及び2020年度において、多様な文化的背景を持つ留学生を交えた教養ゼミを展開し、多文化間共修を実施した。具体的には、筆者教養ゼミに本学留学生および在留外国人の参加を促し、日本人学生との交流が可能になるよう授業を企画・展開した。本稿においては、2年間の教養ゼミの結果として、日本人学生の外国語を学ぶ意欲・異文化理解における多文化間共修の効果を報告する。同時に、留学生にとっての多文化間共修の持つ意義についても、日本人学生との交流および他国からの留学生との交流により得られた効果に基づき報告する。

また、2020年度教養ゼミで筆者は、多文化間共修と同時に大学コンソーシアム富山による「学生による地域フィールドワーク研究」の一環として、「高岡市関係人口創出」をテーマとした地域学習を実施した。そのため当該年度筆者教養ゼミでは、高岡市方面へのフィールドワークを実施し、ここに留学生及び地域の在留外国人を巻き込み、多文化間共修と地域学習の統合型プロジェクトの形式を採用した。このような取り組みは、青木（2014）および藤（2019）において報告されている。先行事例では、「異なる価値観、多様な考え方に触れられたことはよかった」（青木、2014年、p.47）との履修者の感想が報告されている。本稿においては、筆者教養ゼミにおいても同様の効果が得られたかを検証し、報告する。

さらに、2020年度は新型コロナウイルス感染症感染予防のため、前期は遠隔授業を行い、後期は感染予防に努めながら対面授業を実施した。本稿において、多文化間共修における遠隔授業の効果についてもあわせて報告する。

2. 多文化間共修とは

グローバル人材の育成が求められる現代社会において、留学および海外派遣は大きな役割を果たすと考えられるが、その機会に恵まれない学生は少なくない。さらに本年は新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響で、国際交流はほぼ停止状態にある。このような社会状況において、国内またはキャンパス内において異文化を学生に体験させる方法の一つが多文化間共修である。坂本・堀江・米澤 (2017) では、留学生と日本人学生が共に学ぶ意義について、「文化的背景が多様な学生が教室内に存在することでもたらされる効果に期待するところが大きい」(坂本・堀江・米澤, 2017, p.2) としている。

また留学生を交えた授業を実施し、多文化間共修を促進する理念については、次のように述べている。

そういった学生の存在を少数派として扱うのではなく、学びのコミュニティに豊かな視点をもたらす貴重な存在として認識するとともに、学生自身がそれぞれの違いを認め合い、お互いの学びを高めあえる教育的仕組みを構築すること、これが多文化間共修を促進する理念である。(坂本・堀江・米澤, 2017, p.6)

さらに、多文化間共修によって獲得されうるスキル・能力・姿勢として、「コミュニケーション力・自己理解・異文化に対する許容性・オープンな心・・・(中略)・・・相互理解・尊重の姿勢・多面的な見方・外国語力」(坂本他, 2017, p.10) など、約30項目を挙げている。筆者はこの言説に基づき、2019年度および2020年度教養ゼミにおける授業を実践した。またその結果については、「英語によるコミュニケーションを図る意欲」・「異文化に対する許容性・オープンな心」・「異文化理解」としてまとめた。

3. 2019年度・2020年度における授業展開

多文化間共修を実践するにあたり、筆者教養ゼミにおいて、2019年度は本学留学生との交流を主体とした。2020年度は前述の通り、多文化間共修と地域学習を統合した形式で実施した。また、教養ゼミにおける留学生の参加は、留学生個人の自由意思に基づくものであるため、毎時間の参加は困難である。したがって、本稿においては留学生および在留外国人の参加があった授業、または多文化間共修に関連する授業のみを報告する。

3.1 2019年度教養ゼミⅠ・教養ゼミⅡ

3.1.1 2019年度教養ゼミⅠにおける参加者と授業展開

第5回 5月16日

◆目的 本学留学生の実態を知る

◆内容 本学留学生の実態について事務局担当者より説明を受けた。次に、留学生との討論会に向け、留学生への質問事項を出し合った。

第8回 5月30日

◆目的 アイスブレイク・討論会

◆参加者

表1 第8回 教養ゼミⅠ 参加者

内訳	人数
ゼミ生	13名
TA	4名
留学生	6名
	中国4名
	インドネシア2名

◆内容 本学留学生とワールドカフェ形式で討論会を実施した。ここでは、留学生が日ごろ困っていること等について、日本語及び英語で話し合った。参加者の感想を紹介する。

- ・アジア諸国出身者と身近に接するのは初めてだった。(日本人学生)
- ・留学生の積極的な姿勢に驚いた。(日本人学生)
- ・日本人学生との交流の機会を多く持ってほしい。(留学生)

第11回 6月20日

◆目的 留学生との交流会実施のための検討会

◆内容 留学生との交流会の実施内容を検討した。

◆結果 日本人学生との交流の機会を持ちたいとの留学生からの要望を受け、後期に交流会を行うことを決定した。言葉の壁を乗り越えるための工夫をすることになった。

第14回 7月18日

◆目的 留学生との交流を図る

◆内容 COC発表会に留学生の参加を募り、共に参加した。発表会には中国人留学生3名が参加した。筆者教養ゼミの発表は英語で行った。

3.1.2 2019年度教養ゼミⅡにおける参加者と授業展開

第8回 11月16日(土)

◆目的 交流会により異文化理解を図る

◆参加者

表2 第8回 教養ゼミⅡ 参加者

内訳	人数
ゼミ生	13名
TA	4名
留学生	7名
	中国4名
	インドネシア3名
その他	1名
	米国出身在留外国人

◆内容 留学生および在留外国人との交流会を黒河コミュニティセンターで実施した。スポーツ・ゲーム・料理を通じた交流で、言葉の壁を乗り越える工夫を施した交流会を行った。交流会終了後の感想を紹介する。

- ・留学生のコミュニケーション力の高さ、積極性に驚いた。(日本人学生)
- ・宗教の違いにより、豚肉など食べることができないものがあることを初めて知った。(日本人学生)
- ・日本人学生との交流ができてよかった。(留学生)
- ・次回も参加したいので、ぜひ開催してほしい。(留学生)

第10回 12月5日

◆目的 異文化理解を深める

◆参加者

表3 第10回 教養ゼミⅡ 参加者

内訳	人数
ゼミ生	38名
在留外国人	4名
	中国4名
	ブラジル1名
	英国1名
	米国1名
その他	1名
	在留外国人支援者(日本人)

◆内容 在留外国人を招き、ワールドカフェ形式で討論会を行い、異文化理解を深めた。本学教養教育センター中畷崇准教授、確井エリザベス特任講師の協力の下、3つのゼミが合同で実施した。学生は5グループに分かれ、「暮らし」「教育」「多文化共生社会に生きる」をテーマに、在留外国人を囲んで討論した。使用言語は日本語・英語とした。終了後の感想は次の通りである。

- ・「ハーフ」という言葉は良くないと知った。(日本人学生)
- ・日本の子供たちは恵まれていると思った。(日本人学生)

3.2 2020年度教養ゼミⅠ, 教養ゼミⅡ

3.2.1 2020年度教養ゼミⅠにおける参加者と授業展開

2020年度前期は前述の通り、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、遠隔授業を実施し、留学生との交流はオンラインによるものとなった。以下に概要を記す。

第4回 5月14日

◆目的 留学生・在留外国人の実態を知る

◆内容 本学留学生および在留外国人の実態を知るため、留学生を対象としたアンケート調査を作成した。

第5回 5月21日

◆目的 留学生・在留外国人の実態を知る

◆内容 オンラインによるアンケート調査を開始した。(1か月間で留学生11名、在留外国人13名より回答を得た。)

第10回 6月25日

◆目的 オンラインによる留学生との交流

◆参加者

表4 第10回 教養ゼミⅠ 参加者

内訳	人数
ゼミ生	13名
TA	2名
留学生	5名
	中国4名
	ミャンマー1名
その他	2名
	高岡市民

◆内容 留学生とのオンラインによる交流会を実施した。ゼミ生は3グループに分かれ、高岡市をめぐるショートトリップのアイデアを発表した。質疑応答では、留学生からは高岡までの道のり、高岡市内の飲食店に関する質問が出され、これに回答する形での交流を行った。使用言語は日本語・英語とした。

3.2.2 2020年度教養ゼミⅡにおける参加者と授業展開

第0回 8月31日

◆目的 地域を知る

◆参加者 留学生 4名(中国4名、ネパール1名、バングラディシュ1名)

◆内容 地域フィールドワーク研究の一環として、万葉線を利用した高岡市および射水市方面へのフィールドワークを実施した。

第2回 9月29日

◆目的 交流会の準備

◆内容 第8回授業で実施予定の異文化体験会の準備を行った。パキスタン出身で射水市在住の女性を講師として、パキスタン料理について学び、調理の様子を録画した。使用言語は日本語とした。感想は次の通りである。

- ・パキスタン料理に初めて触れ、使用する調味料の多さに驚いた。(日本人学生)
- ・初めて南アジアの文化に触れた。日本の文化とは全く異なることを知った。(日本人学生)

第6回 10月22日

◆目的 高岡市方面フィールドワークを通し地域を知る。留学生は富山県を知る機会とする。

◆参加者

表5 第6回 教養ゼミⅡ 参加者

内訳	人数
ゼミ生	5名(森田農園) 8名(高岡ePark)
TA	2名
留学生	1名(中国)

◆内容 高岡市内の森田農園および高岡eParkへのフィールドワークを実施した。参加者からの感想は次の通りである。使用言語は日本語とした。

- ・昨年の交流会で一緒だった中国人留学生と1年ぶりに再会した。互いの近況報告ができた。(日本人学生)
- ・日本人学生との交流ができた。日本語を話す機会を持つことができた。(留学生)

第8回 11月7日(土)

◆目的 オンラインによる異文化体験会(ハラル料理体験会)

◆参加者

表6 第8回 教養ゼミⅡ 参加者

内訳	人数
ゼミ生	5名
TA	1名
留学生	4名 中国2名 インドネシア2名
その他	7名 パキスタン1名 本学1年生1名 本学教職員1名 他大学学生1名 射水市食生活改善推進員3名

◆内容 zoomを利用したオンライン異文化体験会を実施した。休日に実施したため、他ゼミの学生1名も参加した。グループワークとして実施したため、筆者教養ゼミ生は一

部の学生のみが参加した。使用言語は日本語・英語とした。参加者からの感想は次の通りである。

- ・異文化を知るよい機会となり、留学生との交流を通し、英語のリスニング力向上につながった。(日本人学生)
- ・異文化理解に素晴らしい取り組みだと思います。いつもと違った料理教室で楽しかったです。(射水市食生活改善推進員)
- ・他国からの留学生との交流で、異文化に接することができた。(留学生)
- ・日本人学生との交流の機会になり、日本語を話すチャンスにもなった。(留学生)

第9回 11月19日

◆目的 留学生を知る。留学生との交流の機会を作る。

◆内容 筆者教養ゼミのホームページ作成にインドネシア人留学生1名が参加した。ホームページに本学留学生向け生活ガイドブックを掲載するための打ち合わせを行った。使用言語は日本語・英語とした。

4. 振り返り

各年度教養ゼミ最終日までに筆者教養ゼミ生に提出してもらったアンケート、および留学生からのアンケートを基に2年間を振り返り、報告する。なお、日本人学生を対象としたアンケート調査は、「英語によるコミュニケーションを図る意欲」および「異文化理解」に関連する質問とした。質問文は稲葉(2008)のアンケート調査を参考にし、必要に応じて変更を加えた。

4.1 異文化に対する許容性・オープンな心

2019年度・2020年度の調査で、教養ゼミ受講前後で外国人と話すことへの抵抗感の変化を尋ねた。「教養ゼミ受講前にくらべ、受講後に外国籍の人と話すことへの抵抗が減った」と回答した学生は、2019年度は63.6%、2020年度は33.3%であった。2019年度に比べ、2020年度で結果の数値が低下したのは、新型コロナウイルス感染症感染予防の目的で、留学生との交流の機会が減少したことが原因と考えられる。2020年度教養ゼミにおける活動は、一度に集まる人数を減らすために、グループ活動を主体とした。そのため筆者教養ゼミ生の中には、留学生との交流の機会がほとんど得られなかった学生が存在した。一方で、2020年度において交流会すべてに参加することができた学生4名については、このうち3名(75%)が「抵抗が減った」と答えており、2年間の教養ゼミにおける多文化間共修は、異文化に対する許容性・オープンな心を獲得する方法として

効果があったと考えられる。

4.2 英語によるコミュニケーションを図る意欲

2019年度の調査から、「英語で話すことにはかなり抵抗を感じる」(図1)と回答した学生は、2019年4月の7名(53.8%) (図1) から、2020年1月に1名(7.7%) (図2)に減少した。また、「英語を聞くことにはかなり抵抗を感じる」(図2)と回答した学生は、2019年4月は6名(54.5%)だったが、2020年1月にはなくなった。また別の調査において、「スマートフォンなどを利用して留学生とコミュニケーションを図ることは有効だ」と回答した学生が約半数に上った(2019年11月調査)。これらの結果から、学生は筆者教養ゼミにおける体験を通し、スマートフォン等を利用しながら積極的に英語でのコミュニケーションを図ることができるようになったのではないかと考えられる。

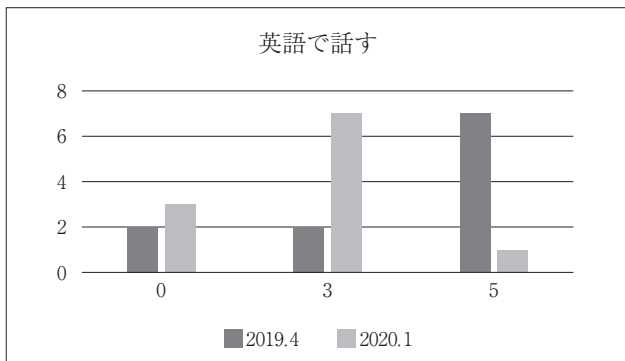


図1 英語で話すことへの抵抗感の変化 (N=11)

0 : 全く抵抗はない 3 : ある程度抵抗がある
5 : かなり抵抗がある

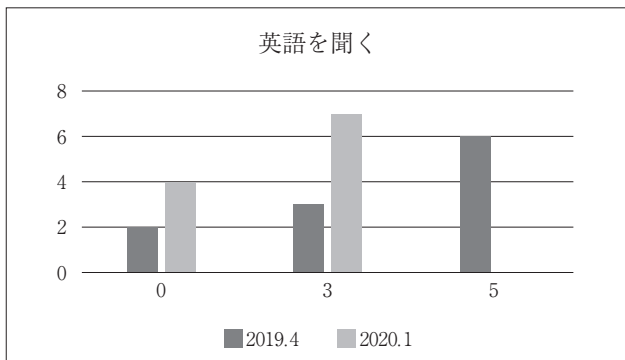


図2 英語を聞くことへの抵抗感の変化 (N=11)

0 : 全く抵抗はない 3 : ある程度抵抗がある
5 : かなり抵抗がある

筆者教養ゼミ生の中には、教養ゼミ終了後も留学生との交流を続けた学生が2名存在した。1名はゼミ生が留学生に日本語を教え、留学生がゼミ生に英語を教えるという交流を続けた。また、他の1名は留学生から中国語を教わるという交流を続けた。さらに筆者教養ゼミにTAとして参加していた学生から、インターンシップ先でインドネシ

アからの留学生と再会した旨の報告を受けた。以下はTAのYさんからの報告である。

・留学生のSさんとインターンシップで再会し、私のことを覚えていてくれて挨拶してくれました。交流会がきっかけで知り合い、つながりを実感できたことを嬉しく思います。違う環境下で目標に向かって奮闘している姿をみて刺激をもらい、自分を見つめ直すことができました。自分も目標に向かって尽力していきたいです。

次に2020年度における結果を図3, 図4に示す。2020年度は2019年度に比べると、「英語で話す」、「英語を聞く」ことに対する抵抗に大きな変化はない。この理由として、2020年度はオンラインによる異文化交流が大部分を占め、留学生と1対1で英語を用いて話す機会が少なかったことがあげられる。オンラインによる多文化間共修において英語を学ぶ意欲を向上させるには、少人数での活動を増やす、授業において英語を使う機会を意図的に増やす等、活動内容に一層の工夫が必要であると考えられる。

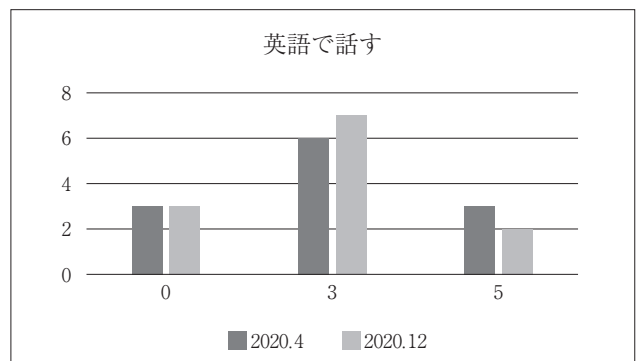


図3 英語で話すことへの抵抗感の変化 (N=12)

0 : 全く抵抗はない 3 : ある程度抵抗がある
5 : かなり抵抗がある

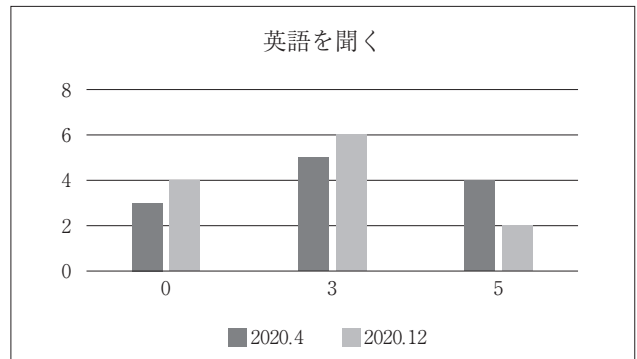


図4 英語を聞くことへの抵抗感の変化 (N=12)

0 : 全く抵抗はない 3 : ある程度抵抗がある
5 : かなり抵抗がある

4.3 異文化理解

アンケート調査において、「多文化共生社会に生きるために最も大切なことは何だと思いますか」との質問に対し、「相手の文化、習慣を知ること」との回答が最も多く、2019年度は72.7%、2020年度は66.7%であった。学生は1年間の異文化交流を通し、坂本・堀江・米澤 (2017) が指摘する「相互理解・尊重の姿勢」を「異文化への理解」という観点で身につけたと考えられる。一方で、「自国の文化を知ってもらうこと」との回答は少なく、2019年度は9.1%、2020年度は16.7%であった。このことから2年間の筆者教養ゼミにおける取り組みは、自国の文化を自ら発信し相手に理解してもらう活動には結びついておらず、相互理解には不十分であったといえる。

4.4 留学生にとっての異文化交流

留学生を対象としたアンケート調査を2020年3月、同年9月、同年12月の3回実施した。この調査では、留学生にとっての多文化間共修における「外国語（日本語）習得の効果」および「異文化理解」に関する質問を行った。交流会に参加した留学生からは、「普段は日本人学生と話す機会が少ないので、この交流会で日本人学生と交流し、日本語を話すよい機会になった」との感想が毎回寄せられた。また「日本人学生との交流の機会が少ないので、このような機会を増やしてほしい」との要望も多い。2020年11月に実施したハラル料理体験会に参加した留学生からは「他国からの留学生との交流で、日本文化のみならず他国の文化を知るよい機会となり、相互理解が深まった」との感想があった。これらの結果から、筆者教養ゼミにおける取組は、留学生にとっても多文化間共修の機会となったと考えられる。

4.5 多文化間共修と地域学習の統合型プロジェクトの効果

2020年12月の留学生を対象とした調査結果において、留学生が参加したイベントで印象に残ったものとして、「地域へのフィールドワーク」との回答が20%あった。また今後参加を希望するイベントとしても、「地域へのフィールドワーク」を選んだ学生が41.7%と最も多かった。一方で、同年同月に日本人学生を対象とした調査においては、「日本（または高岡）のことを質問されても答えられないことがあると思う」との問いに対し、91.7%の学生が「そう思う・非常にそう思う」と回答した。この結果から、2020年度に取り組んだ多文化間共修と地域学習の統合型プロジェクトは、留学生にとっては日本文化を知るよい機会として効果をあげたと言える。しかしながら、日本人学生にとっては「自文化を学び、伝える」機会にはなっていない。次年度以後は、この両者のギャップを埋めるための工夫が必

要である。

4.6 遠隔授業による多文化間共修と対面授業による多文化間共修の比較

2020年度前期は、前述の通りzoomを用いた遠隔授業による多文化間共修を実施した。2020年度後期においても、一部は遠隔による実施とした。ここで遠隔授業による多文化間共修と対面授業による多文化間共修について考察する。

まず、留学生は約半数の学生が対面授業による交流を希望し (42.9%)、遠隔授業を希望したのは4.1%だった。この理由を質問したところ、最も多く挙げられたのは「対面授業の方がコミュニケーションを取りやすい」(26.3%) でであった。また、「遠隔授業では日本語の理解が困難なため、対面で実施してほしい」と直接訴えた留学生も存在した。留学生にとって外国語（日本語）を理解するには、遠隔授業では困難の度合いが上がるようである。

日本人学生についても対面授業による交流を希望する学生が多かった (83.3%)。その理由は、「対面授業のほうが表情や反応が分かりやすい」であった。対面授業を希望する理由として「遠隔授業では英語が理解できない」ことをあげた学生はいなかった。これは本学の遠隔授業により、オンラインで英語を使用することに慣れてきたためではないかと思われる。また筆者教養ゼミにおいては、交流において英語を使用することを必須としなかった。そのため、日本人学生は話し合いで日本語を使用することが多く、使用言語における困難さをあまり経験しなかったことも理由の一つとして考えられる。

4.7 課題

2年間の教養ゼミにおける多文化間共修を振り返り、次の課題があげられる。まず、多文化間共修に参加できる留学生の確保である。留学生が本学教養ゼミに参加することは任意であり、毎回の授業に留学生の参加を得ることは困難である。参加する留学生数が増加する仕組みづくりが必要である。

次に相互理解の観点から、日本人学生が自国の文化を学び発信する必要性を認識できる企画が必要である。次年度以後の教養ゼミにおいては、この点に注意を払い改善を図りたい。

5. 終わりに

2年間の多文化間共修を基礎とした教養ゼミを実施し、日本人学生からは、「異文化に対する理解が深まった」、「外国人に対する苦手意識が減った」という感想が寄せられた。このことから、多文化間共修は、学生が多文化共生社会へ

の認識を新たにする点での効果はあったと考えられる。また、留学生にとっても、日本文化をはじめ他国の文化を知るよい機会になったといえる。

本報告は教養ゼミにおける多文化間共修プログラムの実践に焦点をあてたものである。今後は、筆者教養ゼミにおける多文化間共修が、その後の学生生活において及ぼす影響にも目を向け、アンケート調査の継続と分析を行う計画である。

謝辞

2019年度後期における教養ゼミⅡ・第10回、「異文化理解のための合同討論会」を開催するにあたり、協力をいただきました本学教養教育センター中冨崇准教授、碓井エリザベス特任講師に厚くお礼申し上げます。また、2年間にわたりご支援いただきました本学事務局はじめ、地域協働支援室の皆様には感謝の意を表します。2020年度における筆者教養ゼミにおいては、大学コンソーシアム富山の「学生による地域フィールドワーク研究」助成を受けております。重ねて感謝申し上げます。

引用文献

- 富山県総合政策局国際課多文化共生係, 2010, 「富山県外国人住民国籍・地域別市町村別人員表」,
http://www.pref.toyama.jp/cms_pfile/00011385/01449035.xls
- 富山県立大学, 2010, 「学術交流協定・留学生数等」,
https://www.pu-toyama.ac.jp/education_research/international_exchange/agreements/
- 青木麻衣子 (2014), 「北海道を「フィールドワーク」する」,
『北海道大学留学生センター紀要』, 第18号, pp.41-49.
- 藤美帆 (2019), 「「多文化間共修」と「地域学習」の統合型プロジェクト学習の試み」, ウェブマガジン『留学交流』2019年9月号, Vol.102, pp.1-12.
- 坂本利子・堀江未来・米澤由香子 (2017), 『多文化間共修多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する』, 学文社, 206ページ.
- 稲葉みどり (2007), 「国際交流と学生のグローバル・リテラシーの向上 アンケート調査による効果の分析」,
『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』, 第11号, pp.33-40.

多文化間共修に関するアンケート調査 — その1 —

1. 教養ゼミ受講前は、外国籍の人と話すことに抵抗はありましたか。
 抵抗があった () 抵抗は特になかった ()
2. 教養ゼミ受講前と現在を比較して、外国籍の人と話すことの抵抗は減りましたか
 減った () 変わらない () より抵抗を感じるようになった ()
3. 「変わらない」、「より抵抗を感じるようになった」と答えた人に質問します。その原因は何だと思えますか。
 言葉が分からない ()
 外国人と思うだけで、自分がしり込みする ()
 その他 ()
4. 今後多文化共生社会の構築の必要性は増すと考えられますが、そのために障害となっているものは何だと思えますか。
 言葉 ()
 文化・習慣・宗教の違い ()
 日本人のものの考え方 ()
 その他 ()
5. 今後多文化共生社会で生活するにあたり、何が最も重要だと思えますか。2つ選んでください。
 言葉を学ぶこと ()
 相手の文化や習慣を知ること ()
 日本の文化や習慣を知ってもらうこと ()
 挨拶 ()
 コミュニティの行事とともに参加すること ()
 日本人が積極的に話しかけること ()
 その他 ()
6. 英語でのコミュニケーションについて質問します。教養ゼミ受講前後で、英語でのコミュニケーションに対する気持ちに変化はありましたか。
 「全く抵抗を感じない」を0, 「ある程度の抵抗を感じる」を3, 「非常に抵抗を感じる」を5として回答してください。

	4月ごろ	現在
英語で話すこと		
英語を聞くこと		

多文化間共修に関するアンケート調査 — その2 —

次の質問に0～5のいずれかの数字で回答してください。

5：非常にそう思う 4：ややそう思う 3：どちらでもない
2：あまりそう思わない 1：全然そう思わない 0：教養ゼミでそのような経験がなかった

<日本（高岡の）文化紹介に関する質問>

1. 日本の（高岡の）ことを留学生（外国人）に教えるのは楽しいと思った。 ()
2. 日本の（高岡の）ことを質問されても答えられないことがあった，またはあると思う。 ()
3. 日本（高岡）についてもっと勉強する必要がある。 ()
4. 日本語・日本紹介ワークショップのようなものがあれば参加してみたい。 ()

<異文化理解に関する質問>

5. 留学生（外国人）の考え方や生活を知ることができた ()
6. 日本人と留学生（外国人）との違いに気づいたことがあった。 ()
7. 自分と留学生（外国人）との違いや共通点に気づいたことがあった。 ()
8. 教養ゼミにおける取組で，異文化に対する視野が広がった ()

10～12について，あてはまるほうの () に○をつけ，理由を書いてください。

<オンラインによる多文化間共修について>

10. オンラインより対面での交流のほうが良い ()
理由（自由記述：)
11. 対面よりオンラインでの交流のほうが良い ()
理由（自由記述：)
12. どちらもかわらない ()
理由（自由記述：)

Enhancing Interaction Between Domestic and International Students on Kyoyo Seminar I and II

Satoshi HAYASHI

Department of Liberal Arts and Sciences, Faculty of Engineering

Abstract: Intercultural collaborative learning was conducted on Kyoyo seminar I and II in 2019 and 2020. Internationalization is one of the main themes for universities in the world. More university students have studied abroad recently. On the other hand, however, not all of them have such experiences. Having the similar experience in their campuses should be useful for them who have difficulty studying abroad. Educational effect of intercultural collaborative learning on having willingness and motivation for learning foreign languages and understanding different cultures was reported.

KeyWords: Intercultural collaborative learning, Understanding different cultures, Learning through collaboration with community